

「台湾軍の歌」覚書(七訂稿)

—日本統治下台湾諸歌の一齣—

- (HP 掲載) ・初稿: 平成 20(2008)年 6 月 1 日作成
・改訂稿: 平成 20(2008)年 9 月 23 日作成
・再訂稿: 平成 20(2008)年 10 月 28 日作成
・三訂稿: 平成 20(2008)年 12 月 4 日作成
・四訂稿: 平成 20(2008)年 12 月 16 日作成
・五訂稿: 平成 21(2009)年 8 月 12 日(水)作成
・六訂稿: 平成 25(2013)年 6 月 20 日(木)作成
・七訂稿: 平成 28(2016)年 4 月 3 日(日)作成

〔目 次〕

(七訂稿はじめに)	1
(六訂稿はじめに)	2
(五訂稿はじめに)	5
(四訂稿はじめに)	6
(三訂稿はじめに)	8
(再訂稿はじめに)	9
「台湾軍の歌」覚書(基本: 改訂稿)—日本統治下台湾諸歌の一齣—	11
1 はじめに	11
2 「台湾軍の歌(1)」(仮称: 「(元祖)台湾軍の歌」、「初代「台湾軍の歌」」)	12
3 「台湾軍の歌(2)」(仮称: 二代目「台湾軍の歌」)	14
4 「光輝かがやく台湾軍」	18
5 その他	18

(七訂稿はじめに)

「台湾軍の歌」研究の権威であった三田裕次氏(1949~2014)には平成 26(2014)年 11 月 22 日長逝された。まことに痛惜の念に堪えない次第であり、謹んで御冥福をお祈りするものである(例えば台湾 HP「北投埔林炳炎」〈2014.12.9〉<http://pylin.kaishao.idv.tw/?p=5204> 等参照。)。同氏には個人的にも多大の御指導に与ったが、とりわけ台湾の HP『古い記憶のメロディ』の「ゲストブッ

ク」欄を通じて長きにわたって御懇篤なお教をいただきましたことが懐かしい。当該 HP は台湾のまろやか翁(りょうらいふく氏、1922~)が管理・運営し、三田氏と台湾のヤベ氏(葉雪淳氏、1930~2011?)が支援、協力された実に興味深いサイトであったが、先に従来の「ゲストブック」欄が廃止となり、ヤベ氏も亡くなられ、また三田氏も逝去され、寔に寂しいことである。

(旧 HP 『古い記憶のメロディ』: 〈<http://www.geocities.jp/abm168/>〉)

その後、平成 28(2016)年 3 月末思いがけずさる識者より昭和 15 年制定「台湾軍の歌」の楽譜の教示を受けた。昭和 15 年制定「台湾軍の歌」を検討し始めたのは八年程前であるが、楽譜については当時いろいろ探したものの調査不足で遺憾ながら見つけることができずに現在に至っていた。ただ、この間、ネット上では採譜によるものが掲載されている(例えば、HP「卓上の音楽」⇒「わたしの楽譜コレクション」⇒「日本の歌謡曲・民謡・他」)。

〈<http://verse.jpn.org/music/index.html>〉

〈http://verse.jpn.org/music/score/jp_kayokyoku_ix.htm〉

それが、今般上記識者の御示教により楽譜掲載の公刊文献を知ることができた次第である。すなわち、長田暁二(1930~)編『日本軍歌全集』(音楽之友社、昭和 51 年 10 月 20 日刊)279 頁である。しかしながら、これは、例によって、表題が「台湾派遣軍の歌」、作詩者が「本間雅晴作詩」、作曲者が「作曲者不詳」とあり、またしても如何かと思われるものであるが、いずれにせよ公刊物で曲譜がわかること自体は貴重である。同氏に厚く御礼申し上げるものである。(参考) 当時のレコード: 〈<http://blogs.yahoo.co.jp/axttony/8437483.html>〉参照。

(平成 28 年 4 月 3 日誌)

(六訂稿はじめに)

「台湾軍の歌」の検討を始めてから久しいが、なかなか進展しないことを遺憾に思っていたところ、「五訂稿」(平成 21 (2009) 年 8 月 12 日作成)作成以来まもなく 4 年になろうとする現時点で、驚くべき朗報を得た。

「四訂稿」(平成 20 (2008) 年 12 月 16 日作成)紹介の『台湾軍司令部編 昭和九年台湾軍特種演習写真帳』掲載「台湾軍の歌」(仮称:「台湾軍の歌(1)」、「(元祖)台湾軍の歌」、「初代「台湾軍の歌」」)は、三田裕次先生御旧蔵(現在は広島大学図書館 〈<http://www.lib.hiroshima-u.ac.jp/>〉に「三田図書」〈同図書館 OPAC ⇒「フリーワード」にて「三田図書」で検索〉として所蔵されている。)のものであったが、その曲譜発見については、長年の懸案であった。それが、今回ほぼ解決したやに考えられる。経緯は、次のとおりである。

まろやか翁御主宰の台湾の HP 「古い記憶のメロディー」

〈<http://www.geocities.jp/abm168/>〉の「ゲストブック」に、「うの」氏が、2013(平成 25)年 6 月 6 日(木)17 時 28 分 08 秒「コメント」で、同 HP「軍歌、戦時歌謡アルバム」の「台湾軍の歌 1」につき、同氏御所蔵の昭和 17 年一二三館発行の『皇国軍歌集』に楽譜が載っていることから、今現在も曲譜を募集中ならば、提供する旨 〈http://geocities.yahoo.co.jp/gb/sign_view?member=abm168〉書き込まれたところ、まろやか翁より 2013 年 6 月 7 日(金)13 時 27 分 51 秒「コメント」でお願いしたい旨の御回答があった。その結果、2013(平成 25)年 6 月 17 日 9 時 28 分に、「軍歌、戦時歌謡アルバム」中「台湾軍の歌 1」は、「うの」氏提供の資料により更新され、MDI が作成されるとともに、曲譜が掲載された 〈<http://www.geocities.jp/abm168/>〉。寔に貴重なことである。加えて、まろやか翁は、2013 年 6 月 20 日(木)11 時 21 分に、「うの様提供の資料」とともに、『台湾軍司令部編 昭和九年台湾軍特種演習写真帳』掲載「台湾軍の歌」の歌詞をもアップされた。これらにより、「(元祖)台湾軍の歌」、「初代「台湾軍の歌」」検討については、今後かなりの進捗が見られるはずであり、まろやか翁及び「うの」氏の御貢献、御尽瘁に深甚の敬意を表するものである。以下、気付きしことを一、二言及しておく。

・昭和 17 年一二三館発行の『皇国軍歌集』については、国立国会図書館サーチ 〈<http://iss.ndl.go.jp/>〉、CiNii 〈<http://ci.nii.ac.jp/books/>〉とも所蔵記載がなく、同書の内容及び一二三館の詳細は判明しないが、「近代デジタルライブラリー」 〈<http://kindai.ndl.go.jp/>〉所蔵の他の図書から推察するに、一二三館は、主に軍事用図書を刊行していた出版社かと思われる。

・今回アップされた前掲『皇国軍歌集』掲載歌詞と「四訂稿」紹介の『台湾軍司令部編 昭和九年台湾軍特種演習写真帳』掲載の歌詞とでは、二、三異同がある。

・まず、『台湾軍司令部編 昭和九年台湾軍特種演習写真帳』掲載歌詞(「四訂稿はじめ」参照。)をベースに、差異を示しておく。[] 括弧内のものが、今回の『皇国軍歌集』137 頁掲載のものであり、漢字にはすべてルビが振られているが、本稿では一部語句のみにルビを残した。

「 台湾軍の歌

[「古い記憶のメロディー」 〈<http://www.geocities.jp/abm168/>〉には、「作歌: 白坂義道、作曲: 陸軍戸山学校軍楽隊」とあるが、これは、上記『皇国軍歌集』記載のものかどうかは不明。]

台 湾 軍 作 歌
陸軍戸山学校軍楽隊作曲
[作歌: 白坂義道]

[作曲: 陸軍戸山学校軍楽隊]

- 1、昇る朝日 [旭] に 雲晴れて
椰子の葉光る 南(みんなみ)の
平和の島に 仇浪(あだなみ)を
寄せじと護 [守] る 台湾軍。
- 2、嶋 [島] に文化の 花咲きて
皇威あまねき [普き] 大御代の
治に居て乱を 忘れざる
覚悟は強し 台湾軍。
- 3、亭々 [丁丁(たう／＼)] 天を摩するなる
大王椰子の それ [其れ] に似て
つわもの [兵] どもの 意気高し
見よ鎮南の 台湾軍。
- 4、南溟波は 荒れぬ [荒く] とも
北海風は 強くとも
千引 [地引] の岩と 動き [揺ぎ] なき [なく]
備へは固し 台湾軍。
- (註: 千引の岩: ちびきのいわ)
- 5、東夷西戎 何かせむ [せん]
祖国につくす [尽す] 丈夫 [(ますらを)] の
心の絃 [(つる)] は 満月の
満をぞ [満(みつる)を] 持する 台湾軍。
- 6、金甌無缺 [の] 帝国の
三千年の 皇運を
弥遠長 [弥永久(いやとこしへ)] に 守るべき
責務 [(つとめ)] は重し 台湾軍。

(註: 弥遠長: いやとほなが)

・次に、『皇国軍歌集』137頁掲載の「台湾軍の歌」の歌詞を転載する。

「台湾軍の歌

〔「古い記憶のメロディー」〈<http://www.geocities.jp/abm168/>〉には、「作歌: 白坂義道、作曲: 陸軍戸山学校軍楽隊」とあるが、これは、上記『皇国軍歌集』記載のものかどうかは不明。〕

- 1、昇る旭に 雲晴れて
椰子の葉光る 南(みんなみ)の
平和の島に 仇浪(あだなみ)を
寄せじと守る 台湾軍
- 2、島に文化の 花咲きて
皇威普(あまね)き 大御代の
治に居て乱を 忘れざる
覚悟は強し 台湾軍
- 3、丁丁(たう／＼)天を摩するなる
大王椰子の 其れに似て
兵(つわもの)どもの 意気高し
見よ鎮南の 台湾軍
- 4、南溟波は 荒くとも
北海風は 強くとも
地引(ちびき)の岩と 揺ぎなく
備へは固し 台湾軍
- 5、東夷西戎 何かせん
祖国に尽す 丈夫(ますらを)の
心の絃(つる)は 満月の
満(みつる)を持する 台湾軍
- 6、金甌無缺の 帝国の
三千年の 皇運を
弥永久(いやとこしへ)に 守るべき
責務(つとめ)は重し 台湾軍

・こうして見ると、一部の歌詞に微妙な違いがある。これが何に由来するかは不明であるが、この「台湾軍の歌」そのものは昭和 7(1932)年制定のものであり、『台湾軍司令部編 昭和九年台湾軍特種演習写真帳』の奥付には、「台湾軍特種演習写真帳 昭和九年八月五日印刷 昭和九年八月八日発行 台湾軍司令部」とあることから、刊行年代、発行元権威等からして、まずはこちらを重視すべきではないかと思われる。いずれにせよ、「三訂稿」に記載した当該レコードを聴くことが出来れば解決することであり、その日の近いことを期待したい。

(平成 25 年 6 月 20 日誌)

(五訂稿はじめに)

axttony 氏 〈<http://blogs.yahoo.co.jp/axttony/8437483.html>〉の昨平成20(2008)年11月来の「コメント」欄は興味深いものがあるが、「2009/8/1(土) 午前10:37 [axttony]」によれば、下記に、灰田勝彦の「デジカメ動画収録音源完全版を掲載」された由である〈<http://blogs.yahoo.co.jp/axttony/18247079.html>〉。前に(四訂稿はじめに)末尾に記載したことが更に進展したようであり、貴重なことである。ただし、期間限定との由である(〈<http://blogs.yahoo.co.jp/axttony>〉参照)。

また、axttony 氏 〈<http://blogs.yahoo.co.jp/axttony/54252367.html>〉は、これより先、「2009/7/26(日) 午後0:44」に、李香蘭(1920~)「台湾軍の歌」(「台湾軍之歌」、満洲百楽唱片 SP 盤唱片)の写真を掲載されている。ただし、ここでは、音声アップはされないとのことである。その理由については、上記サイト参照。

(平成21年8月12日誌)

(四訂稿はじめに)

今般、さる識者の御好意で、「台湾軍の歌」(下記「台湾軍の歌(1)」〈仮称:「(元祖)台湾軍の歌」、「初代「台湾軍の歌」〉)の歌詞を確認する機会を得た。「台湾軍の歌」検討上、何よりも有難く、深甚の謝意を表するものである。

先に再訂稿で誌したように、台湾の HP「古い記憶のメロディ」〈<http://www.geocities.jp/abm168/>〉掲載の同歌は、三田先生御秘蔵の台湾軍発行『昭和九年台湾軍特種演習写真帖』に依拠したものである。戦後一般にはほとんど知られていなかった同歌を発見されたことは、大変な御功績と敬服しているが、残念なことに、HP「古い記憶のメロディ」への掲載に当たって、何故か誤植と思われる箇所があった。現在までのところ、上記『昭和九年台湾軍特種演習写真帖』以外に、同歌に言及した文献を見ることができずにいるため、出来得れば同書を見たいと多年念じていたところ、今回、その関係箇所を漸く見ることができた次第である。

これを記しておく、以下のとおりである。表紙には、「台湾軍司令部編 昭和九年台湾軍特種演習写真帳」とあり、奥付には、「台湾軍特種演習写真帳 昭和九年八月五日印刷 昭和九年八月八日発行 台湾軍司令部 印刷者 台北市川端町六二 小山 操 印刷所 台北市京町三丁目 合資会社勝山写真館 申込所 台北市乃木町一丁目 台北偕行社 電話 六〇四番 振替 台湾三六二三」とある。

「台湾軍の歌」は、No.77「閱兵時ニ於ケル空中分列」なる写真の下部に、下記のように、記載されている。註は、当方が誌したものである。なお、曲譜は、掲載されておらず、その発見は、三田先生も指摘されるように、今後の課題で

ある。

再訂稿で、「四聯前半の「つわものどもの 意気高し 見よ鎮南の 台湾軍」は、三聯後半と同じ字句であり、あるいは、HP 掲載時の誤植ではないかとも思うが、確認の仕様がなないので、ここでは、取りあえず、このままにしておく。」と記載したが、今回、この部分は、「南溟波は 荒れぬとも 北海風は 強くとも」の誤植であることが判明した。また、四聯「備え固し」は「備えは固し」、五聯「ますらおの」は「丈夫の」の各誤植であることもわかった。

今後は、この昭和 7 年に作られた「台湾軍の歌」(下記「台湾軍の歌(1)」〈仮称: 「(元祖)台湾軍の歌」、「初代「台湾軍の歌」〉)の曲譜、レコードの再発見が待たれるところである。加えて、同歌制定の経緯、及び「(三訂稿はじめに)」に誌したように、「昭和 7(1932)年制定のものがあつたのに、何故に昭和 15(1940)年に新たなものが制定されたのか」についても、更に検討していく必要がある。

なお、全体にわたって、再訂稿等の誤植その他を修正した。この中で、平成 20(2008)年 11 月 23 日(日)午後 7 時 09 分、axttony 氏が昭和 15(1940)年制定の「台湾軍の歌」SP 盤原音を下記に再掲載されたことに併せて、各関係箇所、その旨を記載した 〈<http://blogs.yahoo.co.jp/axttony/18247079.html>〉。

「 台湾軍の歌

台 湾 軍 作 歌
陸軍戸山学校軍楽隊作曲

- | | |
|-----------------|-----------|
| 1、昇る朝日に | 雲晴れて |
| 椰子の葉光る | 南の |
| 平和の島に | 仇浪を |
| 寄せじと護る | 台湾軍。 |
| 2、嶋に文化の | 花咲きて |
| 皇威あまねき | 大御代の |
| 治に居て乱を | 忘れざる |
| 覚悟は強し | 台湾軍。 |
| 3、亭々天を摩するなる(ママ) | |
| 大王椰子の | それに似て(ママ) |
| つわものどもの | 意気高し |
| 見よ鎮南の | 台湾軍。 |
| 4、南溟波は | 荒れぬとも |
| 北海風は | 強くとも |
| 千引の岩と | 動きなき |
| 備へは固し | 台湾軍。 |

(註: 千引の岩: ちびきのいわ)

5、東夷西戎 何かせむ
祖国につくす 丈夫の
心の絃は 満月の
満をぞ持する 台湾軍。

6、金甌無缺 帝国の
三千年の 皇運を
弥遠長に 守るべき
責務は重し 台湾軍。

(註: 弥遠長: いやとほなが)

」
(平成 20 年 12 月 16 日誌)

(三訂稿はじめに)

本文自体の改訂は、他日に譲り、ここでは、三訂稿作成時において判明したことを、記載しておくこととする。

「台湾軍の歌」について、いろいろと検討してきたが、ここまで来ると、現時点での同歌の関心事は、① 昭和 7(1932)年制定のものがあつたのに、何故に昭和 15(1940)年に新たなものが制定されたのか、しからば、② 昭和 7(1932)年制定のものは、一体どのようなものであつたのか、の二点である。これらについては、今後更なる検討を要するが、本稿註 11 記載の HP「軍歌索盤考」が引用される「パーロホン月報」(昭和 7〈1932〉年 6 月号月報) <http://sakuban.gunka.jp/siryou/s-geppo/paro-ge.htm#1880> について、平成 20 年 12 月 3 日に、原本のコピーを見ることができたので、取りあえず、気付いた点を、誌しておくこととする。

当該コピーでは、奥付が見当たらないので、上記「パーロホン月報」(昭和 7〈1932〉年 6 月号月報)か否か詳細不明であるが、いずれにせよ、昭和 7 年の「パーロホンレコード 七月新譜」の表紙があり、2 頁以下に「パーロホン・レコード 七月新譜(第四十一回)」が掲載されている。その「邦楽レコード之部」3 頁に、「御注文番号 E1880 曲種 軍歌 曲名 台湾軍の歌 作曲者 台湾軍作歌 陸軍戸山学校軍楽隊作曲 演奏者 陸軍戸山学校軍楽隊及合唱隊 指揮 辻楽長 枚数 一枚 定価 1.50(円)」とある。なお、裏面は、E1880 吹奏楽「台湾の思ひ出」(陸軍戸山学校軍楽隊編曲、陸軍戸山学校軍楽隊及合唱隊 指揮 辻楽長)である。

次いで、7 頁に本レコードの紹介があり、「(1880) A 軍歌 台湾軍の歌(台

台湾軍作歌 陸軍戸山学校作曲) B 吹奏楽 台湾の思ひ出(陸軍戸山学校編曲) 陸軍戸山学校軍楽隊(ママ) 指揮 辻 順治楽長

台湾軍の歌は最近新しく制定された、勇壮活潑なメロデー、B 面の台湾の思ひ出は古くから同地方にある俚謡や生蕃の民謡などを巧みに織込んだもので、ドヴルザークの交響曲「新世界より」を連想させる大がかりな吹奏楽です。他社に率先しての発売は小社の少なからざる誇りであります。」とある。

この他、これも、コピーしか見ることができなかったが、『パーロホンレコード 総目録 昭和八年三月まで』(イリス商会パーロホン部 営業所、〈刊行月日不明〉)なる冊子の 13 頁に、「E1880 台湾軍の歌(台湾軍作歌 陸軍戸山学校軍楽隊〈ママ〉作曲) 台湾の思ひ出(陸軍戸山学校軍楽隊〈ママ〉編曲) 陸軍戸山学校軍楽隊及合唱隊 指揮 辻 楽長」とある。

これよりすると、註 10 で誌した「KMT 氏が所持される本歌レコード歌詞カードによれば、作詞、作曲は、「作詞: 白坂義道 作曲: 長保証夫 編曲: 陸軍戸山学校軍楽隊」とは、違って、個人名は入っていないが、このあたりの経緯については、更に調べてみたいと考えている。また、今回の資料でも、「台湾軍の歌」の歌詞、楽譜そのものについては、新たな知識を得ることは、出来なかった。

なお、全体にわたって、再訂稿の誤植等を修正した。

(平成 20 年 12 月 4 日誌)

(再訂稿はじめに)

本再訂稿は、去る平成 20(2008)年 9 月 23 日作成の改訂稿を更に補正した形のものであるが、最初に二、三お断りしておきたい。本テーマの基になっているものは、台湾の HP「古い記憶のメロディー」〈<http://www.geocities.jp/abm168/>〉中の「台湾軍の歌」であるが、最近、同 HP の「ゲストブック」に、重要な記事が掲載された。すなわち、2008(平成 20)年 10 月 11 日(土)22 時 09 分 08 秒に、HP 協力者の葉雪淳氏(ヤベ氏)が、同管理者の「まろやか翁」に、「台湾軍の歌」の MP3 を送ったことが記載され、次いで、同じ葉雪淳氏(ヤベ氏)が、2008 年 10 月 13 日(月)06 時 13 分 41 秒に、これを、下記

〈<http://www.metacafe.com/watch/1857909//>〉にもアップロードされたことが記されていることである。「Una Canción De Fuerza Del Taiwan 台湾軍の歌 - Video」である。

ここには、「昭和 15 年 10 月 日本ビクター No.A-4125 灰田勝彦/日本ビクター男声合唱団」のレコード写真が載せられ、音声を聴くことができる。これ

は、「台湾軍の歌」レコードのそのものであり、寔に貴重なことである。

本稿で従来から紹介してきた同じ台湾の HP axttony 氏「音願値針 蓄音機 SP レコード 辺境の旅」中の「台湾軍の歌」レコードの写真(下記サイト参照。)と同じものではあるが、今度のは、その音声も容易に聴けるところに、大きな意味がある¹。 [〈http://blogs.yahoo.co.jp/axttony/8437483.html〉](http://blogs.yahoo.co.jp/axttony/8437483.html)

したがって、以下(改訂稿)の記述は、上記に基づき、少しく訂正すべき個所もあるが、「台湾軍の歌」を巡る今までの様々な経緯もあり、ここでは、誤植等の修正はしたものの、ほぼ旧稿のまま、再掲しておくこととしたい。

(平成 20 年 10 月 28 日誌)

¹ その後、平成 20(2008)年 11 月 23 日(日)午後 7 時 09 分、axttony 氏は、SP 盤原音を、下記に再掲載された [〈http://blogs.yahoo.co.jp/axttony/18247079.html〉](http://blogs.yahoo.co.jp/axttony/18247079.html)。(平成 20 年 12 月 16 日追加) その後、平成 21(2009)年 8 月 1 日(土)午前 10 時 37 分、axttony 氏は、そこに、「デジカメ動画収録音源完全版」を掲載された。(平成 21 年 8 月 12 日追加)

「台湾軍の歌」覚書(基本: 改訂稿)

—日本統治下台湾諸歌の一齣—

(改訂稿: 平成 20 (2008) 年 9 月 23 日作成。その後、一部修正、追加あり。)

1 はじめに

「台湾軍の歌」なる名をもった歌は、昭和 7(1932)年制定の作詞 白坂義道、作曲 長保証夫、編曲 陸軍戸山学校軍楽隊のもの及び昭和 15(1940)年制定の作詞 台湾軍報道部、作曲 山田栄一²のもの二つがあるが、東京九段の昭和館映像・音響室で聴くことができるもの³や映画『サヨンの鐘』(昭和 18 (1943) 年 7 月公開)で李香蘭(1920~)が歌っている「台湾軍の歌」⁴は、後者であり、これが、現在一般に「台湾軍の歌」といわれているものである⁵。

この「台湾軍の歌」に関しては、多くのネットサイトが種々記載しているが、作詞者と作曲者について、例えば昭和軍歌を収録する有力な CD 集にも記載されている⁶ためか、今でも、何故か、本来の「作詞 台湾軍報道部、作曲 山田栄一」以外の「① 作詞 本間雅晴⁷、作曲 戸山学校軍楽隊」とか「② 作詞 本間雅晴、作曲 大沼 哲⁸」をあげているものがある。いささか不思議なことである。

² 山田栄一(1906~1995)について、例えば、下記ウィキペディア参照。

〈<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B1%B1%E7%94%B0%E6%A0%84%E4%B8%80>〉

³ 昭和館 HP 〈<http://www.showakan.go.jp/>〉参照。同館映像・音響室で聴くことができるものは、「昭和 15 年 10 月 日本ビクター No.A-4125 灰田勝彦/日本ビクター男声合唱団」である。

⁴ 映画『サヨンの鐘』での「台湾軍の歌」は、例えば、下記 You Tube で聴くことができる。

〈<http://jp.youtube.com/watch?v=U6SxYPuHGjQ>〉、

〈http://jp.youtube.com/watch?v=Nqxx_M9RrXA〉

李香蘭の歌った「台湾軍の歌」について、台湾の HP 「古い記憶のメロディー」

〈<http://www.geocities.jp/abm168/>〉の「ゲストブック」中の過去ログ^⑧(2007 (平成 19) 年 6 月 9 日(土) 22 時 19 分)で、KMT 氏は、李香蘭は映画『サヨンの鐘』製作時に台湾総督府の要請で歌うこととなったが、吹き込んだレコードは、市販されず、関係者に僅かに渡っただけであり、同氏はこれを 2006(平成 18)年に入手されたことを述べておられる。

⁵ 例えば、現在、You Tube では、平成 20(2008)年 3 月 11 日掲載の下記のもの聴くことができる。〈<http://jp.youtube.com/watch?v=R8nWeU-HgpE>〉。その後、平成 20 年 8 月 28 日に下記のものも掲載された。〈<http://jp.youtube.com/watch?v=HJmGkmrwPyE>〉(平成 20 年 9 月 23 日追加)

⁶ 〈<http://www.amazon.co.jp/exec/obidos/ASIN/B00005EM5F/rasiel-22/ref=nosim/>〉参照。

⁷ 本間雅晴中将(1887~1946)の台湾軍司令官在任期間は、昭和 15(1940)年 12 月 2 日~同 16(1941)年 11 月 6 日である。同中将について、例えば、下記ウィキペディア参照。

〈<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9C%AC%E9%96%93%E9%9B%85%E6%99%B4>〉

⁸ 大沼 哲(1889~1944)は、有名な軍人作曲家である。宮内孝子『作曲家大沼哲の生涯 : 日本のオーケストラ黎明・胎動期を偲ぶ』(私家版か。平成 5 年 2 月刊)があるという(未見)。

そこで、以下、この二つの「台湾軍の歌」の概要及び後者の作詞者、作曲者の件等について、戦前期の日台両地の多くの歌を収録している台湾の HP「古い記憶のメロディ」〈<http://www.geocities.jp/abm168/>〉(最新:平成 20 年 9 月 22 日閲覧)の「ゲストブック」過去ログ⑭中(特に平成 18 (2006) 年 8 月 1、2 日)のまるやか翁、三田先生及び山田 薫氏、並びに、同過去ログ⑱中(特に平成 19 (2007) 年 6 月 9 日~同月 20 日)の KMT 氏、三田先生及び北川泰男氏の関係記載事項等を一瞥し、整理しておくこととする。「台湾軍の歌」検討の一つのよすがともなれば幸いである。当該 HP「古い記憶のメロディ」は、単に台湾文化史のみならず、諸々の台湾史研究の上にも寔に貴重なサイトであり、管理者氏の大変な御熱意、御努力に敬意を表する次第である。

2 「台湾軍の歌(1)」(仮称:「(元祖)台湾軍の歌」、「初代「台湾軍の歌」」)

昭和 7(1932)年に台湾軍司令部参謀部が歌詞を募集した際の一等当選の白坂義道の作は、上記 HP「古い記憶のメロディ」〈<http://www.geocities.jp/abm168/>〉中の「軍歌、戦時歌謡アルバム」に収録されている⁹が、下記のようなものであるという(最新閲覧:平成 20 年 9 月 23 日)。ここでは、これを、便宜上、仮に、同 HP に記載されているように、「台湾軍の歌(1)」(この他、三田先生のいわゆる「(元祖)台湾軍の歌」とか、あるいは「初代「台湾軍の歌」」)としておく。

三田先生は、上記「ゲストブック」過去ログ⑭(特に 2006 (平成 18) 年 8 月 1 日(火)23 時 26 分)及び同⑱(2007 (平成 19) 年 6 月 9 日(土) 20 時 15 分)で、HP「古い記憶のメロディ」収録の「(元祖)台湾軍の歌」の歌詞は、同氏御秘蔵の台湾軍発行『昭和九年台湾軍特種演習写真帖』からの転載であるとしておられる。なお、曲譜及び作詞者白坂義道については、調査中とのことである。

この「(元祖)台湾軍の歌」の歌詞につき、これら以外に記載されているものは、寡聞にして知らないが、その制定経緯等に関しては、更に検討する必要がある。

台湾軍の歌(1)(仮称:「(元祖)台湾軍の歌」、「初代「台湾軍の歌」」)

作歌 白坂義道、作曲 陸軍戸山学校軍楽隊¹⁰

その他、大沼について、例えば、下記ウィキペディア参照。

〈<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A7%E6%B2%BC%E5%93%B2>〉。また、次のサイトも参照 〈<http://www9.ocn.ne.jp/~yngeibun/senjin/onuma.htm>〉。

⁹ この他、同じ内容のものが、下記「台湾青年」HP にも収録されている。

〈http://tocl.hopto.org/modules/newbb/viewtopic.php?forum=1&post_id=14225&topic_id=2680〉

¹⁰ 後述の KMT 氏が所持される本歌レコード歌詞カードによれば、作詞、作曲は、「作詞: 白

(昭和 7(1932)年台湾軍司令部参謀部が歌詞を募集した際の一等当選の白坂義道の作。曲譜がないため、上記 HP では、下記の歌詞のみを掲載し、曲譜の提供を仰いでいる。なお、四聯前半の「つわものどもの 意気高し 見よ鎮南の台湾軍」は、三聯後半と同じ字句であり、あるいは、HP 掲載時の誤植ではないかとも思うが、確認の仕様がなかったので、ここでは、取りあえず、このままにしておく。¹¹⁾

- 1 昇る朝日に 雲晴れて 椰子の葉光る 南の
平和の島に 仇浪を 寄せじと護る 台湾軍
- 2 嶋に文化の 花咲きて 皇威あまねき 大御代の
治に居て亂を 忘れざる 覚悟は強し 台湾軍
- 3 亭々天を 摩するなる 大王椰子の それに似て
つわものどもの 意気高し 見よ鎮南の 台湾軍
- 4 つわものどもの 意気高し 見よ鎮南の 台湾軍
千引の岩と 動きなき 備え固し 台湾軍
- 5 東夷西戎 何かせむ 祖国につくす ますらおの
心の絃は 満月の 満をぞ持する 台湾軍
- 6 金甌無缺 帝國の 三千年の 皇運を
弥遠長(いやとほなが)に 守るべき 責務は重し 台湾軍

上記 HP「古い記憶のメロディー」〈<http://www.geocities.jp/abm168/>〉の「ゲストブック」過去ログ¹⁸⁾(2007〈平成 19〉年 6 月 9 日(土) 22 時 19 分)で、台湾の KMT 氏は、「(元祖)台湾軍の歌」に関して、レコード収録はされたが市販されなかったこと、原盤録音は「1937 年 6 月 日本ビクター 波岡惣一郎¹²⁾が吹き込んだこと、原盤サンプル盤が存在すること」等を指摘されている。

続いて、KMT 氏は、同 HP「ゲストブック」過去ログ¹⁸⁾(2007〈平成 19〉年 6 月 22 日(金) 17 時 26 分)で、この SP 盤レコードを最近入手されたことを述べ、当該「台湾軍の歌」を収録したレコードは「パローホン盤」が「最初の収録盤」という事になり、同盤歌詞カードによれば、「昭和 7 年 3 月台湾軍司令部応募当選作品 作詞: 白坂義道 作曲: 長保証夫 編曲: 陸軍戸山学校軍楽隊」と記載され

坂義道 作曲: 長保証夫 編曲: 陸軍戸山学校軍楽隊」とのことである。

¹¹⁾ 「(四訂稿はじめに)」で、その後判明したことを記載した。(平成 20 年 12 月 16 日追加)

¹²⁾ 波岡惣一郎(1910~1951)については、例えば、下記ウィキペディア参照。

〈<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B3%A2%E5%B2%A1%E6%83%A3%E4%B8%80%E9%83%8E>〉

ているといわれている¹³。

3 「台湾軍の歌(2)」（仮称: 二代目「台湾軍の歌」）

これは、上記 HP「古い記憶のメロディー」〈<http://www.geocities.jp/abm168/>〉中に、「台湾軍の歌(2)」とあるもの(最新閲覧: 平成 20 年 9 月 23 日)であって、一般に膾炙されているものである。ここでは、便宜上、仮に、同 HP に記載されているように、「台湾軍の歌(2)」(「二代目「台湾軍の歌」」)としておく¹⁴。

¹³ HP「軍歌索盤考」は、「パーロホン月報」(昭和 7 (1932) 年 6 月号月報)を掲載しておられる。これも、実に貴重である。そこには、下記のように、「(元祖)台湾軍の歌」のレコードのことが記載されている。KMT 氏の御指摘のように、パーロホン盤で初めて刊行されたようであるが、作詞、作曲は、同氏のいわれる同盤歌詞カードの内容とは違う。このあたりは不明であるが、あるいは、一般公表用のものなのかも知れない。

〈<http://sakuban.gunka.jp/siryuu/s-geppo/paro-ge.htm#1880>〉

「A 軍歌 台湾軍の歌 台湾軍 作歌 陸軍戸山学校 作曲 B 吹奏楽 台湾の思ひ出 陸軍戸山学校 編曲 陸軍戸山学校軍楽隊及合唱隊 指揮・辻順治楽長

台湾軍の歌は最近新しく制定された、勇壮活潑なメロデー、B 面の台湾の思ひ出は古くから同地方にある俚謡や生蕃の民謡などを巧みに織込んだもので、ドヴルザークの交響曲「新世界より」を連想させる大がかりな吹奏楽です。他社に率先しての発売は小社の少なからざる誇りであります。」(註 11: 平成 20 年 9 月 23 日追加。仮名使いは原本のようにした。)

¹⁴ 同 HP は、先頃まで、ある「在米台湾人」の方の指摘を受けられたためか、この歌の名称を、「台湾派遣軍の歌」として長く登載してこられたが、去る平成 20(2008)年 5 月 13 日に、「台湾軍の歌(2)」に改められたようである。ただ、その解説(註の部分)は、未だに「台湾派遣軍の歌」が出ている。「台湾派遣軍」を「台湾から大陸に派遣された軍隊」といわれたのかも知れないが、「浦塩派遣軍」とか「上海派遣軍」等とかいうように、日本語には普通そのような用法はない。しかし、この影響からか、今でも、ネット上に「台湾派遣軍の歌」なる不思議な名称が多く見られることには、いささか戸惑う。(ただし、下記の件は、本 HP 註 14 参照。その後、平成 20 年 8 月 22 日に改訂されたようである。)加えて、同 HP は、これまた何故か、「本間雅晴作詞・大沼 哲作曲」説を続けておられる。本間雅晴中将(1887~1946)の台湾軍司令官在任期間は、昭和 15(1940)年 12 月 2 日~同 16(1941)年 11 月 6 日であり、「台湾軍の歌」(二代目「台湾軍の歌」)のレコードは、「昭和 15 年 10 月発売 日本ビクター No.A-4125 灰田勝彦/日本ビクター男声合唱団」であって、同中将が作詞されるはずもないと思われる。あるいは、本間雅晴作詞、信時 潔(1887~1965)作曲「比島派遣軍の歌」とか、南支派遣軍報道部作詞、大沼 哲作曲「南支派遣軍の歌」(「南支派遣軍の歌」〈<http://jp.youtube.com/watch?v=dbAOL7sx1DA>〉)

(HP「日本軍歌保管庫」〈<http://rasiel.web.infoseek.co.jp/uta/nanshihakengun.htm>〉参照。)と取り違えておられるのかも知れないが、いずれにせよ、このあたりどうしてこうなるのか、よくわからない。なお、信時 潔については、例えば、下記ウィキペディア参照。

〈<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BF%A1%E6%99%82%E6%BD%94>〉

ちなみに、「比島派遣軍の歌」は、以下のとおりである。

「比島派遣軍の歌」 作詞：本間雅晴 作曲：信時 潔(HP「日本軍歌保管庫」〈<http://rasiel.web.infoseek.co.jp/uta/index2-1.htm>〉に拠る。)

1. 海の鳳 陸の鷲 銀の翼を連ねつつ 飛ぶや南の大空へ 襲ふニコラス ニールソン
クラークフィールド忽ちに 敵機は消えて名にし負ふ 「空の要塞」今いづこ P四〇
の影もなし 燦たり空の撃滅戦
2. 舳艫ふくんで数百の 大船団は海を掩ひ 太平洋の荒浪を 蹴立てて進む呂宋島 暁か
けて精鋭は 弾雨の中を敢然と 椰子の浜辺に攻め上り 首都を目ざして押しよせぬ 燦
たりマニラ攻略戦(註: 舳艫ふくんで: 舳艫相衝〈じくろあいふくむ。前船のとも〈船尾〉
と後船のへさきとが触れ合う意。)、多くの船が相接するばかりに次から次へと続いて進む
様子を表す文語的表現。)
3. 斧鉞(ふえつ)を知らぬ処女林の 神秘の静寂破られて 巨砲の響きもの凄く 谿千仞に
なり渡り 昼は日ねもす夜もすながら 機銃の捻り絶え間なく わが皇軍の猛攻に 脆くも
落ちぬマリベレス 燦たりパターン攻囲戦
4. 探照灯の蒼白く 曳光弾は綾と飛び 弾丸スコールに晒されし コレヒドールの強襲に
不落を誇る要塞も 遂に白旗掲げたり 米極東の根拠地は 斯くてわが手に覆滅す 燦
たり比島派遣軍

¹⁵ 同 HP は、平成 20(2008)年 8 月 22 日に至り、「新資料：SP レコードに印刷された資料が正確だと思い、その記録を列記します。日本ポリドールレコード No.P5309 昭和 17 年(1942)10 月発売 A 面「台湾軍の歌」(太平洋の空遠く) 台湾軍報道部詩 山田栄一曲 東海林太郎 B 面「屠れ鬼畜米英」 筑柴二郎詞 大沼哲曲 東海林太郎・内田栄一・奥田良三・波平恵弘 この記録により詞曲作者を更新します。16:14 2008/08/22」として、「台湾軍報道部詩 山田栄一曲」を掲載された。ただ、この昭和 17(1942)年 10 月日本ポリドール発売の東海林太郎のものは、カバー曲と思われ、最初のもものは、昭和 15 年 10 月日本ビクター発売の灰田勝彦「台湾軍の歌」である。この他、同 HP には、「台湾派遣軍の歌」の「註 2」(最新平成 20 年 9 月 23 日閲覧)が未だに残っており、註全体として、平仄が合わないが、ここでは、上述のように、「台湾派遣軍」を台湾から「大陸戦線に派遣された軍隊」とされている。これがいかなるものかについては、前註 12 で指摘したところである。このように、「台湾派遣軍の歌」と記載するサイトは、なお多々あり、中には、もともと「台湾軍の歌」(「(元祖)台湾軍の歌」のことであろう。)が存在したが、この「台湾派遣軍の歌」が有名になったため、こちらが「台湾軍の歌」となったものであるかのような紹介まであ

上記 HP「ゲストブック」過去ログ¹⁶(2007〈平成 19〉年 6 月 9 日(土) 22 時 19 分)で、KMT 氏は、「二代目「台湾軍の歌」」のレコードは、「昭和 15 年 10 月 日本ビクター No.A-4125 灰田勝彦¹⁶/日本ビクター男声合唱団、因みに B 面は「高砂節」 小唄勝太郎」であって、これがオリジナル SP レコードであり、御私蔵されている旨述べておられる。

これについて詳しくは、同じ台湾の HP axttony 氏「音願値針 蓄音機 SP レコード 辺境の旅」中の「台湾軍の歌」の記述に尽きると思われる〈<http://blogs.yahoo.co.jp/axttony/8437483.html>〉¹⁷。ここでは、「台湾軍の歌」レコードの写真、当時の歌詞印刷物の写真版を掲載した上で、「灰田勝彦 「台湾軍の歌」 昭和 15 年 10 月 日本ビクター」と記載し、「台湾軍の歌」を「台湾派遣軍の歌」と取り違えている向きがあること等を指摘されている。

この歌詞印刷物で、「台湾軍の歌」を採録すると、下記のとおりである。なお、当該レコード写真に見るレコード本体には、「VICTOR 国民 A-4125 台湾

る。仮に事実としたら、実に興味深いことであるが、これらは、いずれも出処が明記されていない。御示教を仰げればと思う。なお、最近、他用があつて、『台湾懐旧 絵はがきが語る 50 年』(創意力文化事業有限公司、1990〈平成 2 年 11 月刊〉。中・日語両版)を改めて見ていたところ、432 頁に「台湾的日本軍隊」、433 頁に「台湾派遣軍」の記載があつた。同書 432 頁は中国語の頁であるが、433 頁は日本語の頁であり、ここは、明らかに「台湾軍」でないとおかしい。「台湾派遣軍」という軍制上存在しない軍隊が日本語の頁に出てきていること、同書がかなり大きな影響を持った写真集であること等が、あるいは、「台湾軍の歌」を「台湾派遣軍の歌」というように、一部の方が考えられた素因の一つなのかも知れない。いずれにせよ、これまた不可思議なことである。(註 15: 平成 20 年 9 月 23 日追加)。

(以下、平成 25 年 6 月 20 日追記)

今回改めて、「古い記憶のメロディー」〈<http://www.geocities.jp/abm168/>〉掲載「台湾軍の歌(2)」を見直すと、そこに、周明德氏(1924~)の「台湾軍の歌史話—主題に因むよもやま話—」なる興味深い記事が掲載されている(「平成 23〈2011〉年 1 月 24 日 17 時 04 分抄録」との由。)。周明德氏は著名な御人物である上、台湾史関係の御著作も多いことから、「台湾派遣軍」云々は、あるいは、こうしたことから有力になったのかとも推察される。なお今後の検討課題である。

〈http://www.shipboard.info/blog2/archives/2011/03/post_139.html〉

〈<http://www.worldcat.org/identities/lcen-no2002-36137>〉

〈<http://cert.kyokyo-u.ac.jp/OkaHP/OkaHP/science/107.htm>〉

¹⁶ 灰田勝彦(1911~1982)については、例えば、下記ウィキペディア参照。

〈<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%81%B0%E7%94%B0%E5%8B%9D%E5%BD%A6>〉

¹⁷ 平成 20(2008)年 11 月 23 日(日)午後 7 時 09 分、axttony 氏は、SP 盤原音を、下記に再掲載された。〈<http://blogs.yahoo.co.jp/axttony/18247079.html>〉(平成 20 年 12 月 16 日追加)

軍報道部作詞 山田栄一作曲 灰田勝彦 日本ビクター男声合唱団」等とある。

更に、KMT氏は、HP「古い記憶のメロディー」
〈<http://www.geocities.jp/abm168/>〉の「ゲストブック」過去ログ¹⁸(2007〈平成19〉年6月6日(金)17時29分)中で、「7.日本ポリドール No.P5309 1942年10月発売 A面「台湾軍の歌」(二代目)台湾軍報道部詩 山田栄一曲 東海林太郎 B面(省略)」の件を記載されておられるが、これからすると、東海林太郎¹⁸の「台湾軍の歌」が、昭和17(1942)年10月に日本ポリドール¹⁹から出ていることが判明する²⁰。

台湾軍の歌

台湾軍報道部 作詞・山田栄一 作曲

- 1、太平洋の空遠く 輝く南十字星
黒潮しぶく椰子の島 荒浪吼ゆる赤道を
睨みて立てるみんなの
護りは我等 台湾軍
あゝ 敵として 台湾軍
- 2、歴史は薫る五十年 島の鎮めと畏くも
神去りましし大宮の 流れを受けて蓬萊に
勲をたてしみんなみの
護りは我等 台湾軍
あゝ 敵として 台湾軍
- 3、滬寧のいくさ武漢戦 海南島に南寧に (註: 滬寧: 上海—南京)
弾雨の中を幾山河 無双の勇と謳はれて
精鋭名あるみんなみの
護りは我等 台湾軍
あゝ 敵として 台湾軍

¹⁸ 東海林太郎(1898~1972)について、例えば、下記ウィキペディア参照。

〈<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9D%B1%E6%B5%B7%E6%9E%97%E5%A4%AA%E9%83%8E>〉

¹⁹ ポリドールレコードについては、HP「ポリドール狂時代～SPレコードとポリドール研究サイト～」〈<http://park6.wakwak.com/~polydor78/>〉が興味深い。

²⁰ 上述(註13)のように、HP「古い記憶のメロディー」〈<http://www.geocities.jp/abm168/>〉も、「台湾軍の歌(2)」について、平成20年8月22日に註記を補正された際に、「日本ポリドール昭和17年10月発売、台湾軍報道部詩 山田栄一曲 東海林太郎歌」のレコードの件を記載されておられる。東海林太郎歌のものは、未だ聴く機会のないものであり、何らかの形で接したいものである。(註17: 平成20年9月23日追加)

4、今極東の黎明に 興亜の鐘は鳴り渡り
五億の民が共栄を 目ざして築く新秩序
前衛としてみんなみの
護りは我等 台湾軍
あゝ 敵として 台湾軍

4 「光輝かがやく台湾軍」

本稿冒頭に誌したように、「二代目「台湾軍の歌」」の歌の作詞者、作曲者を、「① 作詞 本間雅晴、作曲 戸山学校軍楽隊」とか「② 作詞 本間雅晴、作曲 大沼 哲」とする向きがよくある²¹。このうち、「② 作詞 本間雅晴、作曲 大沼 哲」のものについては、HP「古い記憶のメロディー」〈<http://www.geocities.jp/abm168/>〉中の「ゲストブック」過去ログ^⑱(2007〈平成 19〉年 6 月 9 日(土) 18 時 04 分)で、KMT 氏は、「作詞 本間雅晴、作曲 大沼 哲」のものは、「光輝かがやく台湾軍」という別の歌であるといっておられる。

更に、同氏は、当該 HP の「ゲストブック」過去ログ^⑱(2007〈平成 19〉年 6 月 9 日(土) 22 時 19 分)で、「光輝かがやく台湾軍」は、兵士たちの間で歌われたが、レコード化はされなかったこと、同氏自身は「旧台湾軍老兵士」に歌ってもらった録音テープを所持しておられることを述べておられる。

ただ、この「光輝かがやく台湾軍」は、一般にはまったく知られておらず²²、如何なるものかは不明である。KMT 氏も、当該「ゲストブック」過去ログ^⑱では、何故かその詳しい内容を明らかにされておられないこともあり、早急の調査が要望される場所である。識者の御示教を切に乞いたい。

他方、「① 作詞 本間雅晴、作曲 戸山学校軍楽隊」なる歌については、残念ながら、現在知るところが何もない。

5 その他

台湾のネット「維基百科」の「台湾軍」中に、「有関歌曲 台湾軍之歌」があり、解説とともに、「二代目「台湾軍の歌」」の「日語原詞」、「曲盤」の貴重な

²¹ 註 14 で指摘したように、本間中将の台湾軍司令官在任期間は、昭和 15(1940)年 12 月 2 日~同 16(1941)年 11 月 6 日であり、「台湾軍の歌」(二代目「台湾軍の歌」)のレコードは、「昭和 15 年 10 月発売 日本ビクター No.A-4125 灰田勝彦/日本ビクター男声合唱団」であるので、台湾軍司令官たりし同中将が作詞されるはずもないものと思われる。

²² 寡聞にして、本間中将関係文献でも、現在までのところ、目にしたことがない。(本註：平成 20 年 12 月 4 日追加)

写真が掲載されている。

〈<http://zh.wikipedia.org/wiki/%E5%8F%B0%E7%81%A3%E8%BB%8D>〉

上記台湾の HP axttony 氏「音顧値針 蓄音機 SP レコード 辺境の旅」中の「台湾軍の歌」関係資料 〈<http://blogs.yahoo.co.jp/axttony/8437483.html>〉 とともに、まず参考にすべきものである。

(ここまで: 平成 20 年 9 月 23 日追加)

その後、平成 20(2008)年 11 月 23 日(日)午後 7 時 09 分、上記 axttony 氏は、昭和 15(1940)年制定の「台湾軍の歌」SP 盤原音を、下記に再掲載された。貴重なことである。〈<http://blogs.yahoo.co.jp/axttony/18247079.html>〉

(この段: 平成 20 年 12 月 16 日追加)

(以上)